

第7回海洋立国推進功労者表彰受賞者

1. 海洋立国日本の推進に関する特別な功績 分野

普及啓発・公益増進 部門

団体名称	えど こごう 江戸っ子1号プロジェクト	
功績の概要	深海を身近に引き寄せた純国産探査機の開発	

功績事項

1. 下請け体質の打破を目指した町工場の提案が発端となり、前例のない挑戦がスタートした。独自の技術を持つ中小企業等の連携により開発された海洋探査機は、2013年11月、世界初となる水深約8,000m海域での深海魚の3Dハイビジョン撮影に成功し、深海生物の採取も行った。同機には、指先に自動車に乗るほどの高い水圧に耐える特殊なガラス球、電波を通すゴムの実用化による球体間の無線通信、ガラス球越しの3D画像の歪みを補正する技術等、独自の知恵が結集されている。

低廉化・簡便化を果たした無人探査機は、専門家以外は全く手が出せなかった深海を、手軽に調査できる場所に引き寄せた。また、音を出さない探査機により、音に敏感な魚類等の詳細観察が可能となり、海洋研究の観察分野を広げ、より多くの人々に、海洋を知る機会を提供した。

2. 海洋とは無縁の中小企業や大学が、海洋技術という新たな世界に飛び込み、海洋産業の裾野をさらに広げた。地域金融機関の橋渡しにより、産学官金の連携体が組成され、実現に向けた工程管理のもと、試作、実験、品質再構築、信頼度確認を重ね、総力を結集した探査機が開発された。プロジェクトの進展につれ、趣旨に賛同する多数の企業・個人が加わった。地域を超えて連携が拡大し、ものづくりと海洋を軸とする大きなネットワークに発展している。

3. テレビや新聞等多くの取材や報道を通じて、国民各層の海洋への理解促進に貢献した。また、プロジェクトの活動を紹介した児童書等が発行された。未来を担う科学技術人材の育成のため、各方面で指導を行っている。

実機製作や実海域実験も含む同プロジェクトを通じて、最先端の施設や専門性を有する大学・研究機関と、人的・時間的制約の厳しい中小企業とのコーディネートを得意とする人材が育成されている。



第7回海洋立国推進功労者表彰受賞者

1. 海洋立国日本の推進に関する特別な功績 分野

普及啓発・公益増進 部門

<p>団体名称</p>	<p>かいようせいさくけんきゅうざいだん 海洋政策研究財団 ざいだん (一般財団法人シップ・アンド・オーシャン財団)</p>	 <p>OPRF 海洋政策研究所財団</p>
<p>功績の概要</p>	<p>人と海洋の共生を目指した海洋政策 確立への貢献</p>	

功 績 事 項

- 2005年「21世紀の海洋政策への提言」を取りまとめて政府、政党、社会に海洋基本法の制定と海に拡大した国土の管理の重要性を訴え、「海洋基本法研究会」の事務局として「海洋政策大綱」を取りまとめるなど海洋基本法制定に大きく貢献した。その後も事務局として新海洋基本計画へ盛り込むべき海洋施策を国際的・学術的視点を持って研究して提言するなど、我が国の海洋政策の推進に貢献した。
- 学校教育における海洋教育の普及促進に早くから取り組み、我が国の海洋教育発展における基盤構築に大きな役割を果たした。2012年には「海洋基本計画改定に向けた海洋教育に関する提言」を行い、新しい海洋基本計画における海洋教育に関する記述拡充にも大きな影響を与えた。
- 世界海洋フォーラム（GOF）に設立当初から我が国から唯一の参加機関として参画し、「国連持続可能な開発会議」（リオ+20）においては、その主要メンバーとして海洋管理の拡大、漁業の増進、気候変動や海洋酸性化への対応等を盛り込んだ「リオ海洋宣言」の作成に寄与し、リオ+20の成果文書に「海洋」が独立の項目として取りあげられることに貢献するなど、幅広い国際活動を行い、国際社会における海洋政策の確立に尽力してきた。
- 北極海航路の啓開事業に関して、ノルウェー及びロシアの研究所を交えた3カ国プロジェクトとして「INSROP（国際北極航路計画事業）」を1993年より開始し、それに平行して国内プロジェクト「JANSROP」も実施している。これらの成果は国際機関 Arctic Council のレポートにおいて高く評価された。
- 海洋に関する動きを広く社会に共有してもらうために、海洋に関する情報発信に積極的に取り組み、「Ocean Newsletter」の発行、海洋白書の刊行、「海洋問題入門」の刊行、海洋フォーラムの開催等を通じて約40年にわたり海洋政策の普及啓発につとめてきた。



野田（元）総理(右)に海洋基本計画改定に向けた提言を提出(写真中央は高木議員、左は寺島常務)



リオ+20における寺島常務による講演

第7回海洋立国推進功労者表彰受賞者

1. 海洋立国日本の推進に関する特別な功績 分野

普及啓発・公益増進 部門

氏名又は 団体名称	くぼでら つねみ 窪寺 恒己	年齢	62	
所属	国立科学博物館標本資料センター			
功績の概要	ダイオウイカの調査・研究を通じた深海生物に関する普及啓発			

功績事項

- 38年余りを通じて頭足類（イカ・タコ類）の分類学、生態学的研究に精力的に取り組み、17の新種を発見するとともに、食物網における頭足類の重要性を学術誌や博物館展示・教育活動等を通じて普及啓発してきた。特にマッコウクジラとダイオウイカの関係に着目し、2002年より小笠原父島沖で調査を開始し、2004年には世界初となるダイオウイカの連続静止画の撮影に成功、2006年には海面での動画撮影に成功した。そして、2012年にはNHK共同プロジェクトに参画し、自ら潜水艇に乗り込み、人類で初めて深海で生きたダイオウイカとの遭遇を果たした。



NHK/NEP/Discovery Channel
深度630mで観察されたダイオウイカ
- これらダイオウイカに関する一連の成果は、学術誌等に発表されるとともに国内外の新聞、テレビ等のマスメディアや、インターネット等を通じて世界中に広く紹介され、専門分野の研究者のみならず一般の人々に大変な驚きを与えた。特に2013年1月に放送されたNHKスペシャル「深海の超巨大イカ」の視聴率は16.8%に達し、ドキュメンタリー番組としては最高の記録を達成した。また国内だけでなく、この番組の英語バージョンが製作され、欧米各国で放送されており、世界中の青少年の深海生物への興味を引き起こす大きなうねりを作っている。



NHK/NEP/Discovery Channel
潜水艇トライトンの内部
- また、2013年夏に国立科学博物館で開催された特別展「深海」の立案者として、海洋研究開発機構の藤倉博士とともに企画・監修・図録編集を担当した。この特別展では、深海探査の歴史から最新の研究成果まで、子供から大人まで深く分かりやすく伝えることを目的として開催され、三か月の開催期間で59万3千人余りの来場者を迎えた。その他、2013年の新語・流行語大賞の候補に「ダイオウイカ」がノミネートされるなど、ダイオウイカや深海に対する国民の関心を高めることに貢献している。



特別展「深海」の会場の様子

第7回海洋立国推進功労者表彰受賞者

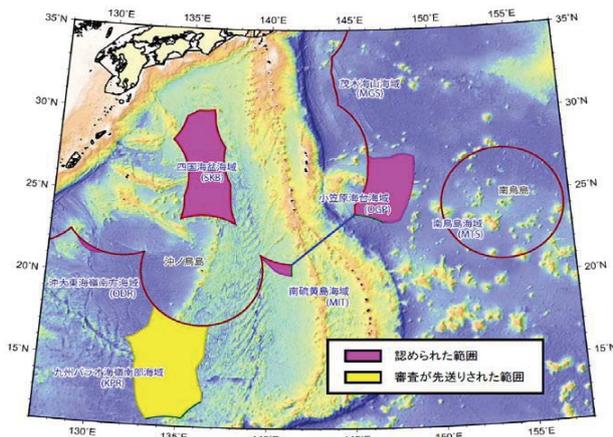
1. 海洋立国日本の推進に関する特別な功績 分野

産業振興 部門

氏名	たけい としふみ 武井 俊文	年齢	83	
所属	株式会社 IHI			
功績の概要	我が国海洋産業の振興への貢献			

功績事項

- 2001年5月に(社)経済団体連合会海洋開発推進委員会の委員長に就任。2003年から、わが国周辺の排他的経済水域(EEZ)およびそれを越える大陸棚の拡大のために実施された大陸棚画定調査(国連海洋法条約において、地形・地質が一定条件を満たす場合は200海里のEEZを超えて大陸棚を延長することが可能でありそのための調査。延長大陸棚においては海底資源に関する主権的権利等が確保できる。)に民間側の横断的な協力体制をとりまとめて、国とともに取り組む民間出資の新会社「日本大陸棚調査(株)」の設立に道筋をつけ、産学官の連携体制の構築に尽力した。
- バブル崩壊後の長期にわたる景気低迷の中、1995年6月に石川島播磨重工業(株)(現(株)IHI)の代表取締役社長に就任。代表取締役社長就任直後の1995年10月に住友重機械工業(株)との間に共同出資会社「(株)マリンユナイテッド」を設立し、造船事業の国際競争力の強化と造船業界再編の先駆的役割を担った。なお、同社は今日において「ジャパンマリンユナイテッド(株)」として世界の造船業界において確固たる地位を築いている。また、(社)日本造船工業会副会長並びに日本船舶輸出組合副理事長、(財)船舶解撤事業促進協会会長として、造船業の発展及び再編に寄与した。
- 海洋科学技術センター会長、(社)日本海洋開発産業協会会長、(一社)日本作業船協会会長、マリンフロート推進機構会長、(一社)海洋産業研究会会長、海洋資源・産業ラウンドテーブル会長などの要職を歴任し、我が国海洋産業の振興と活性化に貢献した。



延長大陸棚の設定



日本大陸棚調査(株)物理探査船「大陸棚」

第7回海洋立国推進功労者表彰受賞者

2. 海洋に関する顕著な功績 分野

海洋に関する科学技術振興 部門

氏名	さの ゆうじ 佐野 有司	年齢	58	
所属	東京大学大気海洋研究所			
功績の概要	海洋地球化学の先端的研究開発			

功績事項

1. イオン源や検出装置に改造を施した4種類の高感度質量分析計を駆使し、さらに、試料の前処理などの実験手法に革新的な改良を重ねることにより、高精度ヘリウム同位体比測定法等の微量元素測定法を開発した(図1)。

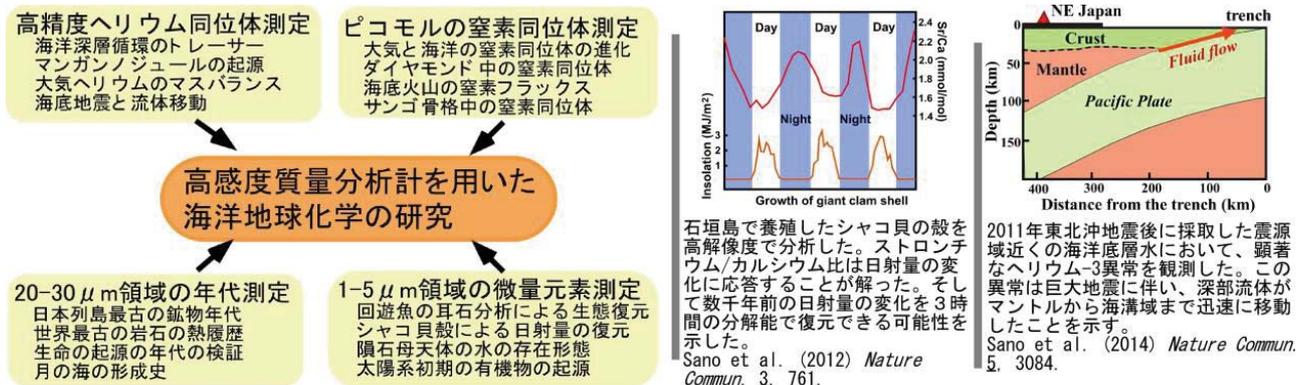


図1 研究業績のまとめ：4種類の質量分析計の統合的な利用

図2 シャコ貝殻の微量元素成分

図3 海溝水のヘリウム異常

2. これらの測定手法を他の補助的手法と組み合わせて、過去の海洋環境の詳細な復元(図2)、耳石分析による回遊魚の生態の復元、海洋深層循環によって生じる物質循環の解明、海底熱水活動やマンガン・ノジュールの成因の解明、深海底堆積物の間隙水と地殻熱流量との関係の把握、海底地震と地球深部の流体移動との関係の把握(図3)、日本海沿岸の天然ガスの起源の解明、地球生命の起源に関する年代の検証、月の海の形成史の解明等、海洋地球化学を中心として環境化学・固体地球化学・惑星化学の様々な分野において優れた成果を生み出した。
3. これらの研究成果は世界的に著名な科学雑誌である *Nature* 誌に6報、*Nature* 姉妹誌に4報、*Science* 誌に2報の論文を含む192報の英文査読付き論文として発表されている。この成果は海洋化学分野においてトップクラスのものであり、2012年12月には60,000人以上の会員を有するアメリカ地球物理連合において、世界で60名しか選ばれないフェローに選出された。さらに2013年2月には科学計測の基礎的な研究において、近年著しい成果を上げた功労者を表彰する島津賞を受けた。
4. 開発した高感度質量分析計を東京大学大気海洋研究所における共同利用を通じて全国の研究者に開放するとともに、計測技術を提供することにより、我が国の海洋化学・地球化学・水産学の学術的発展に尽くしている。これらの功績により2009年には、科学技術分野の文部科学大臣表彰を受けた。

第7回海洋立国推進功労者表彰受賞者

2. 海洋に関する顕著な功績 分野

水産振興 部門

団体名称	しんまつうらぎよぎょうきょうどうくみあいじょせいぶ 新松浦漁業協同組合女性部	
功績の概要	漁村文化の伝承普及、地域活性化	

功績事項

- 2003年から都市部の修学旅行生を対象に実施している民泊受入れや魚料理体験（松浦党の里ほんなもん体験）をつうじ、漁村地域への理解促進、食文化（魚食）の発信を継続して実施している。
民泊受入者数は開始当初の約30倍（30,000人）に、受入漁家数は約10倍（114軒）に増加するなど、漁村地域と都市部との交流による漁村地域への理解促進についての取り組みが年々拡大している。
- 約20年前から、地元の小中学生を対象に実施している魚料理講習会や親子料理教室では、子供たちが献立から考案し下処理を施していない鮮魚を使用するなど、独自の取り組みで魚への興味を高めている。
さらに、親子一緒に料理することで親子のコミュニケーションを醸成するなど、効果的な魚食普及・食育に取り組み、地元水産業への理解促進、地産水産物の消費拡大に大きく寄与している。
- 民泊の受入地区は、松浦市をはじめ北松浦半島と周辺の島々に拡大し、受入漁家の高齢者と都市部の中高生たちとの世代を超えた交流により、漁村文化の伝承が図られているほか、受入漁家の収入向上も見られるなど地域経済への波及効果も大きい。
さらにリピーターの増加が見られるなど、地域活性化の面においても長崎県における先駆的取り組みである。



民泊受入れの様子



魚料理講習会



高齢者との交流

第7回海洋立国推進功労者表彰受賞者

2. 海洋に関する顕著な功績 分野

海事 部門

氏名	つだ なおてる 津田 尚輝	年齢	73	
功績の概要	産学官が一体となった日本主導による戦略的国際基準策定等のための仕組みの構築			

功績事項

1. 我が国の海事産業が今後も国際競争力を維持していくためには、海事産業が一体となって国際基準の策定や技術開発を推進しなければならないとの時代の要請に応えるべく、我が国海事産業の国際競争力強化を目的として、産学官が一体となった戦略的国際基準策定のための仕組み（プラットフォーム）を構築するとともに、当該仕組みを活用し、外航船舶からの二酸化炭素排出削減にかかる国際基準や、シップリサイクル条約等、我が国の海事分野に大きな影響を与える基準を我が国主導で策定する際、その中心的な役割を果たした。



国際海事機関（IMO）における国際基準の議論

2. 現在、世界の海洋資源開発プロジェクトで最も注目されているブラジルへ我が国造船業が進出するための素地を作るべく、「産」、「学」、「官」が連携した取り組みを先駆けて主導した。



ブラジル国営石油会社要人との会談 津田氏（右から6人目）

第7回海洋立国推進功労者表彰受賞者

2. 海洋に関する顕著な功績 分野

自然環境保全 部門

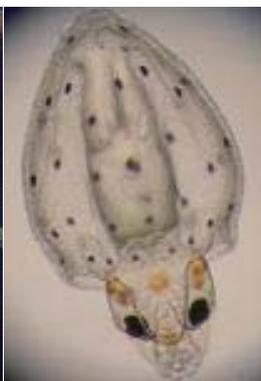
氏名	さくらい やすのり 桜井 泰憲	年齢	63	
所属	北海道大学大学院水産科学研究院			
功績の概要	海洋生物多様性保全に対する専門的助言			

功績事項

1. 長年にわたり海洋生態学及び高次動物生態学の専門家として、特にイカ類の生態や資源変動機構に関する研究を主導し、レジームシフトの概念をいち早く日本で紹介するなど資源管理に有益な助言を与えた。
2. 知床世界自然遺産候補地科学委員会委員として、遺産登録案件を審査する IUCN への対応に当たるなど、登録の実現に大きな貢献を行った。
3. 氏が中心的に関与し策定された知床世界自然遺産地域多利用型統合的の海域管理計画は、漁業者による自主的管理のモデルとして広く世界に紹介された。氏は、漁業者をはじめとする多くの利害関係者間の合意を得るために中心的な役割を担っており、漁業と海洋生態学をつなぐ視点から貴重な示唆を与えている。
4. 2005年には中央環境審議会臨時委員に就任し、自然環境部会・野生生物部会において、自然公園法等の海域保全の強化に関する改正や、生物多様性国家戦略の改定に関わるなど自然環境行政に貢献した。その他、海洋生物多様性保全戦略の策定や我が国の生物多様性の保全上重要な海域の抽出に関わるなど環境省の多くの事業に対し有益な助言を行った。



飼育中のスルメイカ



スルメイカの
ふ化幼生



流氷に囲まれた知床半島